

映画教育 活映

復刻版
(全4期)

活字から活映へ!!
メディア史の空白部分が
ようやく明らかに!!

戦前日本を代表する総合メディア企業・大阪毎日新聞社が主導した「ポスト活字」運動の軌跡を記録した雑誌『映画教育』（一時期『活映』と改称）全183号（1928～1943）を完全復刻!

第Ⅰ期 第1号～第58号（1928年3月～1932年12月）
第Ⅱ期 第59号～第94号（1933年1月～1935年12月）
第Ⅲ期 第95号～第142号（1936年1月～1939年12月）
第Ⅳ期 第143号～第183号（1940年1月～1943年4月）

[監修] 毎日新聞社
[解説] 赤上裕幸（防衛大学校公共政策学科准教授）
[体裁] B5判上製・総12,082頁
[揃定価] 各本体190,000円＋税 ※各期分売不可

本資料集を推薦します

(50音順・敬称略)

完全復刻されると聞いては捨て置けない

荒俣宏

(幻想科学史家)

戦前ニッポンには尖端的な文化改革運動が多数あったが、すべて忘れられている。新しい文字創造にまで及んだ国字改革運動やカナモジ普及運動だけではない。紙と活字を一気に通り越し、映画・テレビ・WEBといったマルチメディアを先取りする「活映教育」が満州で実験されたというのだから、捨て置けない。あの「学天則」を開発した西村真琴博士、火星の土地を売り出した原田三夫など、捨て置けない人びとの集った機関誌『映画教育』が完全復刻されると聞いては、さらに捨て置けない。

1920～30年代の研究に、
さまざまな論点が引き出せる宝庫

有馬学

(福岡市博物館長・日本近代史)

『映画教育』という臭いタイトルに惑わされてはいけない。主催者の水野新幸（大阪毎日新聞社活動写真班主務）は、「シネマは活きたエスペラントだ」と唱え、映像を文字と同列に置くことを主張した人物である。彼は1933年の段階で、映像文化が印刷文化を凌駕する時代の到来を、テレビの発明が暗示すると指摘しているのだ。この雑誌は、広く1920年代から30年代の日本の社会的現実と映像との関わりに関心を持つ人にとって、さまざまな論点が引き出せる宝庫となるだろう。

伝説の雑誌の待ちに待った復刻

佐藤卓己

(京都大学大学院教育学研究科准教授、メディア史)

待ちに待った『映画教育』と『活映』の復刻である。電子ブックの普及がようやく本格化してきた今日、まことに時宜を得た企画である。昭和戦前期、「活字」時代にかわる「活映」時代の到来を予言した伝説の雑誌が『映画教育』だ。「映画」は当時のニューメディアであり、「教育」とは未来への期待である。『映画教育』はただ映画の教育論を集めた雑誌ではない。未来を眼差したニューメディア論の宝庫なのだ。目次を眺めているだけで、発掘すべき「お宝」に心が躍る感だ。

刊行計画

第Ⅰ期 第1号～第58号（1928年3月～1932年12月）全9巻 総3276頁
揃定価（本体190,000円＋税） ISBN978-4-7601-4361-0 C3374

第Ⅱ期 第59号～第94号（1933年1月～1935年12月）全6巻 総2520頁
揃定価（本体190,000円＋税） ISBN978-4-7601-4371-9 C3374

第Ⅲ期 第95号～第142号（1936年1月～1939年12月）全8巻 総3430頁
揃定価（本体190,000円＋税） ISBN978-4-7601-4378-8 C3374

第Ⅳ期 第143号～第183号（1940年1月～1943年4月）全7巻 総2856頁
揃定価（本体190,000円＋税） ISBN978-4-7601-4387-0 C3374

おすすめ先

メディア史／教育史／
日本映画史／満州映画史／
大学図書館・公共図書館など

柏書房

〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13
TEL: 03-3830-1891 FAX: 03-3830-5337
http://www.kashiwashobo.co.jp

取扱店

映画のみならずラジオ・テレビ・視聴覚教育と いったメディア史の「空白部分」が 明らかとなる伝説の雑誌！

『映画教育』『活映』とは

本誌『映画教育』は、「紙」をこの世から消滅させようとしたポスト活字論者・水野新幸（大阪毎日新聞社活動写真班主務）を中心に、活字文化に代わるものとして活映文化の到来を予測し、ニューメディアの未来予想図を提示しました。その意味で、今日の「活字からウェブ」をめぐる議論を先取りしており、メディア史研究に新たな視座を与えてくれます。本誌は、本山彦一、乗杉嘉壽ら忘れられた辺境メディア人や波多野完治、城戸幡太郎ら児童心理学の専門家、荒俣宏『大東亜科学綺譚』で紹介された科学啓蒙家・原田三夫と万能科学者・西村真琴、さらには権田保之助、巖谷小波、与謝野晶子、村山知義、坪内逍遙、賀川豊彦、村嶋婦之など著名人も多数寄稿しており、豊かな活映人脈をベースに刊行が毎月継続されました。

水野は、教科書の代わりとなる「テキスト・フィルム」を無償で配布し、貧困層の教育機会拡大につなげようというアイデアを披露しています。これは、電子書籍などのタブレット端末を利用したICT（Information and Communication Technology）教育の発想とまったく同じものです。映写機の普及状況や文部省の映画政策、各学校・各都道府県の映画教育実施状況、戦後視聴覚教育運動への架け橋ともなった巡回映写運動の基礎的データなど、豊富な数字データとあわせて、今日の教育史研究に十分応用可能な内容です。

日本から満州へと活躍の場を移した水野は、大毎出身者とともに満州で活映教育の実験を繰り返しました。これがのちの満州映画協会（満映）、さらには戦後日本のアニメ映画の礎となっていきます。本誌により、プレ満映時代の満洲映画史の「空白部分」が埋められることでしょう。

さらに、東京裁判で証拠資料として上映された『非常時日本』は、戦時期を代表するプロパガンダ映画として知られていますが、そこには、活字に取って代わる次世代メディアへの期待が込められていました。本誌は、この作品の謎を解き、戦時期メディアとプロパガンダ研究にも一石を投じます。

本誌の今日的意義を明快に示す懇切丁寧な解説を付し、広範な分野の研究者にはもちろんのこと、学部生の卒業論文にも使える汎用性の高い資料です。

本資料集の特長

- ①メディア史のなかのSF的想像力（センス・オブ・ワンダー）の遺産としての、20世紀のポスト活字論
- ②豊かな活映人脈をベースにした多彩な寄稿者（別掲参照）
- ③映写機の普及状況、文部省の映画政策、各学校・各都道府県の映画教育実施状況、その他数字データも多数収録、教育改革の生きた資料として参照可能
- ④プロパガンダ映画の代表作『非常時日本』の謎ときとなり、戦時期メディアとプロパガンダ研究に一石を投じる
- ⑤プレ満州映画協会（満映）時代に光を当て、満州映画史の空白を埋める
- ⑥豊富なデータに裏付けられた巡回映写運動の基礎的資料。戦後視聴覚教育運動への架け橋ともなる
- ⑦映画史研究者のみならず、ラジオ、テレビ、視聴覚教育など、比較メディアの観点から様々なメディア研究者が利用可能。学部生の卒業論文にも使える内容



1928年3月号（創刊号）の表紙



1933年1月号（第59輯）、『活映』に改題した時の表紙（デートリッヒ）



1933年3月号（第61輯）、表紙（『非常時日本』撮影の様子）



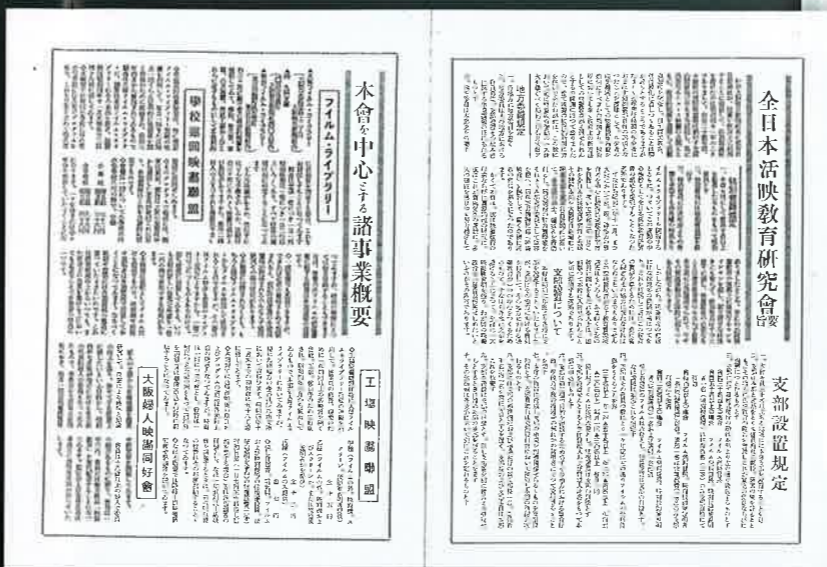
1938年12月号（第130輯）、表紙



1940年9月号（第152輯）、
「映画および映画教育に関してどんな本と雑誌を読んでいるか」



1928年6月号（第4輯）、「子供に見せたいと思ふ映画」



1930年2月号（第24輯）、「全日本活映教育研究会要旨」



1933年6月号（第64輯）、
「放たれた巨弾は何と響く！—絶賛の輿論は空理に非ず—」（『非常時日本』）

寄稿者の一例

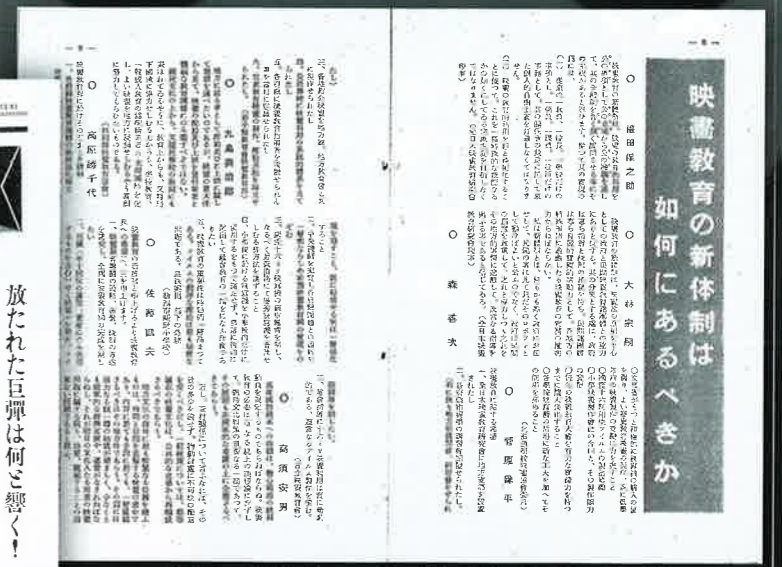
水野新幸、本山彦一、乗杉嘉壽、中田俊造、橋高広（立花高四郎）、石巻良夫、松平覚義、青地忠三、権田保之助、海野幸徳、巖谷小波、大妻コタカ（大妻学院設立者）、古屋登代子（古屋女子英学塾長）、永井郁子（挿絵画家）、厨川蝶子、与謝野晶子、柳原輝子（白蓮）、三宅やす子、婦山教正、村田実、村山知義、坪内逍遙、賀川豊彦、村嶋婦之、袋一平、桜井忠温、大藤伸郎、大林宗嗣、駒田好洋、北尾鏡之助、北山清太郎、原田三夫、西村真琴、波多野完治、城戸幡太郎、板垣鷹徳、関野嘉雄、岩崎利、有馬頼寧、谷本富、鳩山一郎、紀俊秀



1929年4月号（第14輯）、「『新聞時代』—全三巻—」



1933年10月号（第68輯）、
「満洲活映研究会結成への導火線—新京活映座談会記—北に活映政治ソヴイエトをひかへて—翻然実行の拳に出た！ 満洲はのびる」



1941年1月号（第156輯）、「映画教育の新体制は如何にあるべきか」